

2023年7月16日 主日礼拝

説教題「わたしを何者だと言うのか」マタイによる福音書 16章 13～20節

主任牧師 加藤 誠

「イエスは言われた。『それでは、あなたがたはわたしを何者だと言うのか。』」(マタイ16章15節)。

「バプテスト教会ってどんな教会ですか？」と問われたら、皆さんはどのように答えますか？「全浸礼を大切にしている教会です」「一人ひとりの信仰の自由を大切にしています」「牧師も信徒の一人です」「総会を一番大切にしている民主的な教会です」など、いろいろな応答が可能でしょう。

今から約四百年前に誕生した英国のバプテストのグループに注目するとき、そこに見えてくるのは「信徒一人ひとりが聖書を読み、語り合いながら、真のキリスト教会のあり方を追求した群れ」です。英国の国教会が認定した神学部できちんと学び卒業した牧師がいて、その牧師が語る「教会とはこうあるべし」「クリスチャンはこうあるべし」という教えにただ黙って従うのではなく、信徒たちが「でも、聖書にはどう書いてあるのだろう」と祈りながら聖書を読み、聖書が示している教会のあり方を大胆に求めていったのです。

当時の英国国教会とはどういう教会であったか。教会は各町に一つずつ国によって建てられ、例えば大井の住人は自動的に大井教会に、大森の住人は大森教会に登録されました。生まれたらすぐに嬰兒洗礼を受けて教会に登録されるので、家族全員が自動的にその地域の教会の教会員になるのです。勝手に他の教会に行くことは認められません。それぞれの教会の牧師は国が決めて配置します。いずれも正式に神学校を卒業して認定試験に合格した牧師たちです。国が雇うわけですから公務員であり、給与は国からもらいます。そして、どの教会も、国教会が決めた通りの礼拝、聖書箇所での説教、祈りがささげられていました。

けれども、そのような教会のあり方に疑問を持つ人たちが出てきたのです。「これって聖書が示している教会のあり方なのだろうか？」と。例えばバプテスト。赤ん坊が自動的に洗礼を受けてクリスチャンになる。それって聖書的なのだろうか？ローマの信徒への手紙 10章 9節には「口でイエスは主であると公に言い表し、心で神がイエスを死人の中から復活させられたと信じるなら、あなたは救われる」と書いてあるのではないか。であれば「口で告白した人にバプテストを授けるべきではないか」と。国教会の教えに首をかしげる人たちが一人二人と、自分の教会の礼拝を出て、自主的に集まり聖書研究を始めたところに生まれたのがバプテストの教会でした。彼らは、自分たちの聖書研究の結果に基づいて、口でイエス・キリストを救い主として告白してバプテストを授けて教会を形づくろうとします。それは個人の信仰告白ですから、夫は国教会のままだけれども、妻はバプテストの教会に参加するということが起こったのでした。

しかし、それは国教会の規則を踏みにじる重大な違反であり、「国の秩序を乱し、家族という共同体を破壊する非常に危険な連中だ！」ということで、最初期のバプ

テストの人たちは大変な迫害を受けます。しかし大きな犠牲を払っても、「とにかく聖書で考える」（聖書主義）「家族単位ではなく個人一人ひとりの信仰の尊重」（個人の信仰の自由）、「自覚的な信仰告白によるバプテスマ」という原則を大切にしようとする闘いの中にバプテストの教会は生まれたのでした。

その意味で「今日、私たち大井教会はバプテスト教会になりえているだろうか」という点検は常に必要です。「バプテスト教会」と看板に書かれていたら自動的にバプテスト教会になるわけではないのです。「うちはずっとこのやり方でやってきたから」「牧師先生がこう言われたから」という言葉で、「一人ひとりが考えることを止めて思考停止すること」がバプテストにとって一番怖いことです。牧師に「お任せ」、委員や役員の人たちに「お任せ」が一番楽です。今、8月からの礼拝プログラムをコロナ前の形に戻そうとしていますが、「なぜこのような礼拝プログラムなのか？」と、聖書をもとに考え続けること、話し合い続ける機会にしたいのです。

その時に覚えておきたいこととして、今朝はマタイ 16 章の「ペトロの信仰告白」の場面をご一緒に読みました。ここでわたしが大切だと受けることは二つあります。

一つは、私たちはペトロたちと同じように「あなたはイエスを何者だというのか」という迫りをそれぞれ受けているということです。「あの人はこう言っている」ではなく「わたしはイエスをどう受けるのか」、わたしの言葉、わたしの「証し」が求められています。今年のペンテコステ礼拝では 10 人の方たちが自分の言葉で「聖霊の働き」を証ししてくださった時、私たちの心は震えました。「聖霊の働き」とは何と多様なのだろうか。一人ひとりの違いの中に働いておられる神さまの働きのダイナミックさに心が震えたのです。それと同じように「わたしにとってイエスとはどういうお方なのか？」「どういう救い主なのか？」。一人ひとりが自分の言葉で証ししていくことが主イエスに求められていることであり、主イエスはそれぞれの個性ある告白を喜んで受けてくださる方だ…ということです。

二つ目は、しかし、一人ひとりの告白は大切でありながらも、私たちの告白が教会を建てるのではない。教会を建てるのは主イエスご自身だということです。「わたしはこの岩の上に、わたしの教会を建てる」と主イエスは言われました。「この岩」というのは、ここで「主告白をしているペトロのこと」です。自分の言葉で主イエスを証しするペトロなしに教会は成り立たないのです。けれども、教会を建てる主語は「イエス・キリスト」であって「ペトロ」ではない。なぜなら主イエスが「わたしの教会」と呼ばれているように、教会は「キリストのもの」だからです。

ここに「緊張」があります。一人ひとりの告白は大切でありながら、「自分が正しい」と自分を絶対化してはならないのです。常に聖書との対話、人々との対話の中で「キリストはなんておっしゃっているのだろう」と、共に祈りながら考えていく。自分に与えられた言葉を大切にしながらも、お互いの真ん中にイエス・キリストを求めて、自分が対話により、聖書にり、「変えられ、成長させられていくこと」も喜んでいく。そこにバプテスト教会の活力、ダイナミックさがあるのではないのでしょうか。共にバプテスト教会に招かれたことを喜んでいきたいのです。